

水交会海軍歴史公開講座  
2024年11月23日(土)

【海軍人物論】山本五十六と軍縮

元防衛大学校教授 相澤 淳

【山本五十六関連年譜】

(大正8年)

1919年 4月	米国駐在(～21年8月)
19年12月	海軍中佐
21年 8月	巡洋艦「北上」副長
21年12月	海軍大学校教官
23年 6月	欧米出張(～24年3月)
23年12月	海軍大佐
24年12月	霞ヶ浦海軍航空隊教頭兼副長
25年12月	米国大使館付武官(～28年3月)

(昭和3年)

28年 8月	巡洋艦「五十鈴」艦長
28年12月	航空母艦「赤城」艦長
29年11月	ロンドン海軍会議(第1次ロンドン会議) 全権委員随員(30年6月帰国)
29年11月	海軍少将
30年12月	航空本部技術部長
33年 8月	第1航空戦隊司令官
34年 9月	昭和十年海軍軍縮会議(第2次ロンドン会議)予備交渉 帝国代表(35年2月帰国)
34年11月	海軍中将
35年12月	航空本部長
36年12月	海軍次官
39年 8月	連合艦隊司令長官
40年11月	海軍大将
43年 4月	戦死(海軍元帥)

## 1, ワシントン会議 (1921～22年)

「ワシントン条約の結果に鑑み、深く日本の将来を洞察し、我国将来の必勝戦備は航空機にあると看破せられ、夙に航空軍備の確立を唱道せられた」(海兵 32 期同期の井上継松の回顧、反町栄一『人間・山本五十六』光和堂、1964 年、241 頁)

## 2, 第 1 次ロンドン会議 (1930 年)

「聞けば左近司さんは一再ならず次官に大叱られに叱られる程のヘマをやっているのでみんな心配で堪らず誰かしっかりした者をと物色した結果山本さんに白羽の矢が立った なんでも堀さんが適任者もないので遠慮しながらクラス・メートの山本少将を推薦したらしく、山本さんの役は軍縮のことなど知らなくてもよいから唯々強く頑張れと云うのだ相だ」(佐藤信太郎編『父、佐藤市郎が書き残した軍縮会議秘録』文芸社、2001 年、138 頁)

「とうとう海軍の次席随員の山本五十六少将(後に元帥)が、大蔵省がこれ以上主張するなら全海軍は鉄拳(てっけん)をもって制裁すると、とんでもないことを言いだした。それで随員会議は全く混乱に陥って、とうとうそれ以後開かれない。私と山本少将は口もきかないという仕儀になってしまった」(賀屋興宣「私乃履歴書」防衛研究所戦史研究センター所蔵、21～22 頁)

「何れにせよ大臣の出处進退は公明にして且断固たるを要す 会議の敗戦に臨み、最後の名誉を留むる唯一の道は唯々大臣の進退其の前に合し、「海軍尚未だ我を欺かず」との事実を国民に示すに在り」(「四月二日口頭進言(対財部全権)」防衛研究所戦史研究センター所蔵)

「帰国した山本は国内の騒ぎを無視して鎌倉の自宅に引きこもり、一時は海軍を退くのではないかといううわさも流れた。このあとの山本は、いわゆる条約派的な考え方を固めていき、海軍航空の建設と整備に全力をそそぐようになったのである」(野村実「海軍軍縮と山本五十六」新人物往来社編『山本五十六のすべて』新人物往来社、1985 年、67 頁)

「劣勢比率を押しつけられた帝国海軍としては、優秀なる米国海軍と戦うとき、先ず空襲を以て敵に痛烈なる一撃を加える」（新人物往来社編『追悼 山本五十六―昭和 18 年 9 月 25 日発行『水交社記事』より』新人物往来社、2010 年、52 頁）

### 3, 第 2 次ロンドン会議予備交渉（1934 年）

「今、日米開戦となった場合を思うに、戦勝の端緒を何処に求めるか。大砲でも、水雷でもない、茲に搭乗員達が、魚雷なり爆弾なりを抱いて、敵戦艦の檣楼に体当りを喰わせるよりは遺憾乍ら手はないのだ。然も此の搭乗員達は自分の命一下、直に此の事を敢行して呉れる事と確信する」（坂井多美子編『三和義勇「山本元帥の思い出」』私家版、1999 年、51 頁）

「私は河井継之助先生が小千谷談判におもむかれ、天下の和平を談笑の間に決せられんとした、あの精神をもって今回の使命に従う決心だ。軍縮は世界の平和日本の安全のため、かならず成立させねばならぬ」（反町『人間 山本五十六』331 頁）

「今次會議ハ遂ニ成功せずとするも 英米を叩頭せしむるの日必しも遠からざるか如く被感候 海軍としてハ何ハともあれ航空の躍進こそ急務中ニ急務なり」（坂井編『三和義勇「山本元帥の思い出」』91 頁）

「吉田よりの第一信に依り君の運命を承知し、爾来怏々不快の念に不堪  
出発前相当の直言を総長にも大臣にも申述べ大体安心して出発せるに事茲に到りしは誠に心外に不堪  
如此人事が行はるる今日の海軍に対し之が救済の為努力するも到底六かしと思はる、矢張山梨さんが言はれし如く海軍自体の慢心に斃るるの悲境に一旦陥りたる後立直すの外なきにあらざるやを思はしむ  
爾来会商に対する張合も抜け身を殺して海軍の為なといふ意気込はなくなってしまうたゝあまりひどい喧嘩わかれとなつては日本全体に気の毒だと思へはこそ少しでも体裁よくあとをにごそふと考へて居る位に過ぎない」（大分県先哲史料館編刊『大分県先哲叢書 堀悌吉資料集 第一巻』2006 年、326 頁）